OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	樋口一葉「大つごもり」論 ： 松原岩五郎の小説・下層社会ルポルタージュとの関連に注目して
Author(s)	屋木, 瑞穂
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 15-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70981
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

樋口一葉「大つごもり」論

――松原岩五郎の小説・下層社会ルポルタージュとの関連に注目して――

屋木瑞穂

はじめに

「大つごもり」（明二七・一二『文学界』第二四号）は、西鶴文学の影響の下に成立した所謂「奇蹟の期間」の幕開きの作品と位置づけられてきた。その写実性が注目され、西鶴作品の素材的影響について早くから議論されてきた。[1] 前田愛氏は、『世間胸算用』巻頭にみられる「銭銀なくては越されざる冬と春との峠」としての大晦日の暗喩を取り入れた「金銭をめぐる抑圧と解放のドラマ」として捉え、その「『量』と『物』の輪郭を鮮明に具えた世界」の即物的な描写に西鶴の影響を見いだし、石之助の「受取一通」によってお峯の二円の窃盗の罪を隠すという「大つごもり」の数字の「トリック」に注目して、『西国諸国ばなし』巻一の「大晦日はあはぬ算用」との類似性を指摘している。[2]

本稿は、「大つごもり」の写実的描写が内包するリアリティーについて、従来注目されてこなかった同時期の松原岩五郎の下層社会ルポルタージュとの関連を視野に入れて具体的に考察し、また森田思軒による「社会の罪」の主張の影響下に西鶴の手法を取り入れた松原の小説との類似点と相違点を検討することを通して、この作品の特徴について捉え直す試みである。

一、西鶴を受容した松原岩五郎の作品との関連

「大つごもり」は、数字の多用、特に金銭の額が事細かに記されているのが特徴である。お峯の伯父安兵衛が、「高利貸」から借りた借金の額は「十円」、「一円五十銭は天利」として引かれ、手に入ったのは「八円半」、「九月の末よりなれば此月」は「約束の期限」だが、借金の利子「をどりの一両二分」を払えば「三月の延期」になるという話を打ち明ける。伯父は、返済期限の延長に必要な一円五十銭に正月の「雑煮」代五十銭を加えた「二円」の工面をお峯に依頼する。田中優子氏は、数字を頻繁に使用した西鶴小説の影響を指摘し、西鶴の数字が「非常に大げさで、それ

は『笑い』を誘う仕掛け」であるのに対して、一葉小説では、冒頭の数字表現がお峯の労働の苛酷さを表現しているように、その数字の使い方の差異について述べている。[3]

そこで、具体的な数字を多用した写実的描写という観点から注目したいのは、同時期の下層社会ルポルタージュとの関連である。周知のように当時の新聞雑誌には、下層社会探訪記といわれるルポルタージュが数多く載っていた。とりわけ大我居士（桜田文吾）の「貧天地飢寒窟探検記」（明二三・八・二九～一一・八『日本』、後明二六・六単行本として出版）、また乾坤一布衣（松原岩五郎）が「芝浦の朝烟（最暗黒の東京）」（明二五・一一・一一～二六・一・一四）以降、『国民新聞』に「探検実記　東京の最下層」（明二六・六・一～七・五）、「東京　最暗黒の生活」（明二六・八・九～二三）という形で連載し、明治二六年一一月に単行本化された『最暗黒の東京』（民友社）は大きな注目を集め、版を重ねた。そのルポルタージュの中で、松原は下層社会の実態を詳細に写す際に、数字を頻繁に使用している。例えば、「芝浦の朝烟（最暗黒の東京）」の「其七　売買及び貸借」（明二五・一一・三〇『国民新聞』）では、「高利貸」について「五十銭を貸して日に二銭づゝ一ヶ月に済しくづすあり。一円貸して三銭づゝ四十日に済すあり、月二割の利息とす。到底期限に納まらざるを例とす」[4]というように語っているが、具体的な数字表現はルポルタージュのリアリティーを支えている。松原は同記事の中で、「西鶴が晩年。家政の経済を説くところ、今現に通用するこそ慧けれ」（同年一一・二六『国民新聞』）と述べ、また『最暗黒の東京』の中では、「江戸、大坂の貧街に於て此の種の融通の行はれし事は井原氏西鶴の諸書にも見えたり」と言及しており、西鶴が描いた人間の金銭との格闘を当代にも通ずる様相として捉えている。横山源之助は「社会的文士を評す」[5]（明三九・九『中央公論』）の中で、「社会の文字が世に称へらるゝに至りしは明治二十五六年以来の事」であり、「社会的傾向を帯べりと称せらるゝ某々の文士出づ」として、「西鶴の文反古胸算用に随喜せる松原二十三階堂」を挙げている。「松原二十三階堂の長者鑑」は、「『社会の罪』を描ける森田思軒に師事」して「西鶴流の経済観を振舞はし」、「当時は其の作物を以て社会的傾向を帯べる者とせられき」と述べ、さらに「日清戦役後文学の勃興と共」に「『社会小説』という名称起り」、「樋口一葉の小説に、おのづから其の傾向あり」と一葉の作品もその系譜に連なるものとして捉えている。

ここで注目したいのは、森田思軒の「社会の罪」の影響下で現れた文学の「社会的傾向」という文脈の中で松原岩五郎の小説が注目され、西鶴の影響が指摘されていることである。「社会の罪」とは、森田思軒の講演を文章化した「社会の罪」（明二四・五『国民之友』第一一八号）を示すが、思軒は講演の中で板垣退助暗殺未遂事件を取り上げ、犯人相原を単なる暴徒と見なさず、犯罪を生みだす背景にこそ問題があるというヴィクトル・ユゴーの「社会の罪」の考え方に共鳴し、今日の文学者が「社会の罪」を訴える文学を創造すべきだと訴えて大きな反響を呼んだ。留意し

たいのは、こうした森田思軒が主張した「社会の罪」の文脈と西鶴受容が交差していることである。すでに指摘があるように[6]、当時松原は西鶴流行と関連がある小説家として指摘されており、この時期の代表作として、『好色二人息子』（春陽堂、明二三・一二）、「長者鑑」（明二四・六『新著百種』第一五号）、「新長者鑑」（明二五・一〇『都の花』第九二～三号）等の小説が発表されている。同時代批評では、「『長者鑑』に到つては着想の頗る西鶴が『胸算用』又『永代蔵』に類せるを覚ふ」（「長者鑑」、明二四・七『国民之友』第一二五号）と西鶴との関連を指摘し、「作家の主とする処」は、「社会之罪に憤ふるものか」と述べている。

ここでまず「大つごもり」との関連で注目したいのは、「新長者鑑」である。『都の花』に発表された同作品は、同時期に一葉の「うもれ木」（同誌第九五～九七号、明二五・一一～一二）が掲載されており、一葉が目にした可能性は極めて高いといえる。この作品は、一八歳の主人公鶴松が、年間の収支決算日である大晦日に借金の返済に迫られ、窮地に追い詰められて盗みを犯すという話で、大晦日を金銭に翻弄されて過ごす人間を描いた西鶴の『世間胸算用』の影響が濃厚な作品である。主人公は父母を亡くして零落し、長兄の死後は「母とも姉とも思」う兄嫁と共に、「活計なるだけ約（つま）しく受酒を売」り、「借金は年賦に崩して貰ひ」やり繰りしていた。そして大晦日、「天賦正直」で「温厚」な性格のために「酒代の催促」もままならない鶴丸は、「胸算用に気をもみて一寸の身も落着かず」、「債主」からの「催促に姉様が内で気に病むで居らるゝ容子」、「定めし断りも仕難からう、気の毒な事と、色々と思い遣」り「焦燥て」いた。その時、「証文貸」先の商人に会い、「債主から矢の催促、此の節季三百両の金がなくては我々姉弟の頸が繋げぬ」と催促するが断られ、切羽詰まって懐中の「懐嚢（かみいれ）」を盗み取る。「正直」で「温厚」な人物を造型し、そういう若者を盗人にならざるを得ぬ状況へと追い詰める「社会の罪」を訴えるというところに作者の意図がみられる。西鶴作品の手法を取り入れ大晦日に焦点を絞った構造、数字を多用した写実的描写、お峯と同年齢の一八歳の主人公が窮地に陥り、親代わりの存在への恩義に迫られて盗みを犯すという金銭をめぐる葛藤が描かれている点が、「大つごもり」と類似する。このように「大つごもり」の背景には、従来指摘されてきた西鶴の影響のみならず、思軒が主張した「社会之罪」の影響下で出現した松原岩五郎の作品との類縁性が看過できないのである。

二、下層社会ルポルタージュとの交差

「大つごもり」では、裕福な山村家と貧しい伯父一家とが対照的に描かれている。高田知波氏は「大晦日という一種の極限的な時間軸上に浮き彫りにされた貧と富とのコントラスト」という構図に注目して、「貧富の差に対する抗議の念がモチーフとして強くはたらいていたことは明らか」であると指摘している[7]。また、西川祐子氏は、「借家から裏長屋へと追われてゆく細民と、貸し長屋を建てては富み栄えてゆく富豪とが対照的に描き分けられて

いる」と指摘し、「女中の盗み、放蕩息子がする親の金の持ち出しの向こうには、犯罪よりも犯罪的な社会の仕組みが透けてみえ」ると述べている[8]。確かに、「大つごもり」は、階層の間に置かれた下女の視点からみた微視的な日常世界を描きながら、その背後にお峯を犯罪へと追い詰めていく巨視的な社会の仕組みを喚起する力をもつといえよう。そこで、そうした「大つごもり」の喚起力の背景にある同時代言説として下層ルポルタージュとの関連について考察したい。一葉小説と下層社会ルポルタージュの関連については、小森陽一氏が「たけくらべ」冒頭の「取材記者」のような語り手の視点に注目して、「貧民窟探訪という視点で意識的に書かれた小説」であると指摘しているが[9]、「大つごもり」との関連については、これまで具体的に検討されていない。

中川清氏は、下層社会ルポルタージュの系譜における桜田文吾『貧天地飢寒窟探検記』の特徴として、「貧民窟」が貧困と富裕の対比という形で語られ始めたことを指摘している[10]。「万年町の歳暮歳首」（明治二四・一・五『日本』）では、人々が待ち望む年末年始を、「飢寒窟」の人々は、「大晦日に至れば家主は一軒ごとに長屋を廻りて屋賃の催促を為す其厳格なること通常月末の比にあらす屋賃は日掛月掛の二種ありて少き者は三十銭位より多きは二円四十銭位の延滞ありといふ彼等は自己の食を減するも屋賃の幾分かは是非才覚せさるへからす」というように、「大厄日」として恐れていた事情が語られている。「大つごもり」では、「貸長屋の百軒」という莫大な資産を持つ山村家では、大晦日は、「旦那」が「沖釣り」に興じていても「貸付けのもどり」が入り蓄財が増す日であり、一方「稼手なし」の伯父一家にとっては、借金返済期限を延長して無事に年を越すための二円を八歳の三之助が長距離を歩いて貰いに来る日であるという対照が描かれている。紀田順一郎氏は、桜田のルポルタージュの「先駆性」について、「貧しい人々の側」に立って「富裕階級を鋭く告発する視点を確立した」（『東京の下層社会』筑摩書房、二〇〇〇・三）と述べている。また、下層社会探訪記事が「社会の矛盾面に対決し、批判的な説得力をもってくるのは、桜田文吾を経、松原岩五郎や横山源之助のルポルタージュ」の出現からであるという指摘もある[11]。松原は、「探検実記　東京の最下層」（明二六・六・一『国民新聞』）の中で、「文明物質的の進歩が貧富の懸隔を促して上下貴賤の交際を絶ち、富者は増々富んで貧者はます〳〵貧しく積貧亦貧をなし層々また層々到底江戸の下層を以て想像すべきに非ず」というように貧困の性格も江戸時代とは異なり、貧富の差が拡大する方向に動く文明の罪過を指摘している。また、「米価（しき）荐りに沸騰して細民咸（みな）飢に泣き、諸方に餓死の声さえ起るに、一方の世界には無名の宴会日夕に催ふされて歓娯の声八方に湧き、万歳の唱呼は都門に充てり」（『最暗黒の東京』）というように、貧富を対比しながら貧民の惨状を訴えている。看過できないのは、下層社会ルポルタージュの叙述は、単なる実態の描写ではなく、社会の矛盾に対する鳥瞰的な見取り図を与えるものでもあったということである。

「大つごもり」には、こうした下層社会のルポルタージュの叙述と重なる要素がみられる。お峰は、恩義ある伯父が患い八百屋も閉じたと聞いたが見舞いに行けず、ようやく師走の一五日に歌舞伎見物への同行を辞退して、その翌日「遊びの代りの」臨時休暇を得た。小石川初音町の裏長屋への転居を余儀なくされた伯父一家を初めて訪ねる場面では、いきなり伯父の「裏屋住居」へと場面転換せずに、「貧乏町」に足を踏み入れる場面をあえて描いている。お峯が「車より下り」て「尋ぬる」うちに出会った三之助に伴われて伯父一家の住む路地裏に足を踏み入れていく場面が、「酒やと芋やの奥深く、溝板がた〳〵と薄くらき裏に入れば」というように描かれている。お峰は、「六畳一間に一間の戸棚只一つ」で「長火鉢のかげもなく、今戸焼の四角なるを、同じ形の箱に入れて、此品がそも〳〵此家の道具らしき物、聞けば米櫃もなきよし」というような伯父一家の窮乏を見ると、「師走の空に芝居みる人もあるを」と「涙ぐまれ」て山村家との貧富の差に心痛める。このように「貧乏町」の家を訪れたお峰の視点は、松原の下層社会ルポルタージュに、「貧区に入」て「陋巷に踏入る」と「棟割の家並低く、ゆがみなりの廃屋斜めに溝尻うけて建つゞ」き、「居の広さ」は「三畳に土間二尺」、「家財はと見れば、屋内さがして古葛籠一個の身上」で「膳腕あれども縁は欠けたり」（「芝浦の朝煙（最暗黒の東京）」明治二五・一一・一一『国民新聞』）とあるような視線と重なる部分がある。「芝居」を「見のがしてはと娘共」が騒ぎ、「綺羅をかざり」見物に出かける山村の娘たちとは対照的に、末娘と同じ八歳の三之助は、「寒空に小さな足に草鞋」を履き「蜆売り」をして父親の「薬代」を稼ぐという健気な孝行ぶりであると聞き、お峯は「取乱して泣」く。お峯が「取乱し」たのは、「学校ざかりの年に蜆を担がせて姉が長い着物きて居らりようか」という言葉にみられるように、「先生様にも褒め物」の三之助が、「貧乏なればこそ蜆をかつ」いで「活計の助け」をしていると聞かされた時である。先に触れた桜田文吾『貧天地飢寒窟探検記』では、「貧と教育とは両立しがたき勢あり」として、貧困家庭の教育問題に言及し、「貧民の子弟」に対する「五厘」学校の取り組みについて述べている。三之助が「五厘学校」へ通うことは、貧困の連鎖を断ち切り、将来の稼ぎ手として一家を窮地から救うための足がかりとしての重要な意味をもっている。伯父が病に伏したのは九月末、その後「三月ごしの今日まで商ひはさらなること、段々に食ひへらして天秤まで売る仕義になれば、表店の活計たち難く」なり、商売道具を売り払ったあげく店をたたんで「うら屋」に転居を余儀なくされた。家賃は「月五十銭」とあるが、松原岩五郎は『最暗黒の東京』の「（十一）飢寒窟の日計」で貧民の「家賃の階級」について、「上等なるものは日掛四銭」、「下つて月五十銭より四十銭のものあり大破放任野獣の居と其結構を比するに遠からざるものあり」と述べている。伯父一家の家賃は同ルポが伝える貧民の最低水準であり、その逼迫ぶりが窺える。伯父が「寝てからは稼手なしの費用は重なる、四苦八苦を見かね」て、三の助が「蜆売り」をして

「十銭」、妻の内職は「日に十銭の稼ぎも成らず」という始末である。お峯は七歳の時から伯父夫婦に養育されて、路頭に迷うことなく生きてこられたが、伯父一家の実子である八歳の三之助は、「三ヶ日の雑煮に箸を持たせずは出世前の三之助に親のある甲斐もなし」という伯父の言葉にあるように、正月の雑煮を家族で囲むというささやかな幸せさえも奪われようとしている。

松原岩五郎の『最暗黒の東京』の「（十六）座食」では、「零落の一大歴史」について、「倒産して其主人の奮発を喪ふたる場合」や、「災難或る事情に遭ふて余儀なく彷徨的生活を採るに至りたる場合」など、「一家族」が「下等の或る階級より或階級に転ずるの際」には、「其命脈大概二、三年にして竭（つ）るを例とす、其短命なるに至つては三ケ月五ヶ月満一年を出でずして亡ぶものあり」と述べている。その零落の過程について、「第一其家を売り其造作を売り、其商品の残物を売却して一時借屋住をなす」と語っているが、伯父一家のたどった経緯と重なる。さらに、「貯金は第一年に蕩尽され、衣類什器は第二年に蕩尽され而して無形の融通は第三年に至つて其跡を断つ、家族は行在所を退（ま）からざるを得ず」と記述している。こうした松原のルポルタージュを視野に入れると、「我が病気も長くはあるまじ、少しよくは気の張弓、引つゞいて商ひもなる道理、あゝ今半月の今歳が過ぎれば初春はよき事も来るべし」という伯父の言葉は現実味をもたず、お峯は「又の宿下りは春長、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの」と「此金を受合ける」が、伯父一家が負債を全額返済できるまで経済的に回復している可能性は極めて少ないとみられる。もし伯父一家が今の生活を続けるならば、その先の近い将来にどのような悲惨な生活が待っているかを、松原のルポルタージュは暗示しているといえる。

三、お峯の正当化―「社会の罪」の文脈との関連―

「下」では、お峯が盗みへと追い詰められていく心情が描かれている。「上」で伯父一家の窮状を見て山村家との貧富の差に心痛めたお峯は、伯父の依頼した「二円」の金の調達を、「多くではなし夫れだけで此処の始末がつくなれば、理由を聞いて厭やは仰せらるまじ」と温情を期待して承諾する。だが大晦日、「義理」の放蕩息子に対して苛立つ御新造の「機嫌かひ」により「給金の前貸り」の約束を破棄されたお峯は、「ヱ、大金でもあることか、金なら二円、しかも口づから承知して置きながら十日とたゝぬに耄ろくはなさるまじ」と怒りにかられる。このお峯の怒りには、伯父への恩義が果たせないという思いだけからではない激しさが込められている。裕福な山村家にとっては「懸け硯の引出し」に遊ばせておく札束の「唯二枚」にすぎない僅かの金で極貧の「伯父が喜び伯母が笑顔、三の助に雑煮の箸も取らさるゝ」と思うと、「二円」の金の重みの違いを痛感して貧富の差に憤り、「どうでも欲しきは彼の金ぞ」と切羽詰まった気持ちになり、今まで「辛棒」してきた「吝き」御新造の「無情」に対する「恨めし」さが湧き起こる。そして、「昼過ぎにと先方へ約束のきびしき金」を

何とか工面しなければという焦りの中で、御新造の娘の出産騒ぎに乗じて、「拝みまする神さま仏さま、私は悪人に成りまする、なりたうは無けれど成らねば成りませぬ」と心の中で叫びながら、やむなく「硯の引出しより、束のうち」の「唯二枚」を盗んでしまうのである。

大晦日の夜、恒例の「大勘定」が始まり、二円を盗み出した懸硯の中の金も確かめられることなって罪の発覚を覚悟したお峯は、「大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし方もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、欲かしらねど盗みましたと白状はしましょ」と決意する。「大旦那」の前で「御新造が無情そのまゝに言ふてのけ」るとは、自分が盗みを働くに至った原因が、伯父一家の窮状を救うために懇願した「立換へ」を「承知して置きながら」、約束を破棄した「御新造が無情」にあることを訴えることになる。谷川氏は、同時代の下女物語の系譜の中に位置づけて、「お峰のなかに貧・孝ゆえの盗みという免罪の論理が先取りされていることが重要」であり、この点にこそ「受難する下女を扱った他の作品の主人公たちとの貌だちの違いがあった」と指摘している[12]。また、お峯の正当化について、松下氏は「山村家への罪という語りは存在しない」ことに注目し、「『貧人』を正当化させる近代の貧民救済言説との相似性がある」と指摘している[13]。

さらに、ここで注目したいのは、先にも触れたような犯罪を生みだす背景にこそ問題があるというユゴーの考え方に共鳴した森田思軒の「社会の罪」の主張や当時大きな反響を呼んだユゴーの翻訳作品との関連である[14]。森田思軒の翻訳「クラウド」（明二三・一～二『国民之友』第六九～七三号、後増補版『探偵ユーベル及クラウド』民友社、明治二四・一〇）は、やむなく罪を犯した人間の心理に焦点を当てた作品である。貧しいクラウドは、家族の「飢へ」という「事情の為めに迫られて盗」みを働き、牢に繋がれ、不当な扱いを受け、やむなく作業場の主任を殺害する。クラウドは法廷で陪審員を前に「正直に其の顛末を細説」し、「余は何が故に物を盗めるや」と抗議の声を発する。作者ユゴーは結末部で、「クラウドを見よ一個の敏明至潔の人物なり而して悪境界の中に入れられたるが為め彼は遂に盗となれり」というように、「生れ得て美質」をもつクラウドが盗みを働くに至った事情に読者の関心を向け、貧困、劣悪な社会環境のためにやむなく犯罪に追い詰められた者を、追い詰めた「社会の罪」を問うこともなく断罪してよいのかと訴えている。日記（二七・六・一六「水の上日記」）の記述によれば、一葉は磯野徳三郎（筆名無腸道人）の『依緑軒漫録』を借りている。この書物の中では、ヴィクトル・ユゴーの略伝及び著書解題が本文引例を挙げて創作の範として紹介されているが、一葉は「今宵通読」と記しており関心が窺える。

「大つごもり」の「上」ではお峯が、「鬼の主」と評される御新造の下で苛酷な労働環境に耐えて「勤め大事に骨」を折り、世間から「感心なもの、見事の心がけ」と評判の下女であることが印

象づけられ、「下」ではそうした「辛棒もの」で「正直は我身の守り」を信念とする娘が窮地に追い込まれて、「悪人」に「なりたうは無けれど成らねば成」らぬ不条理に直面していく過程が描かれている。お峯が「大旦那」を前に、御新造の「無情」を訴えようとする際に「言ふてのけ」ようとした「欲かしらねど盗みました」という言葉は、先に触れた思軒訳「クラウド」の主人公が陪審員を前に発する「余は何が故に物を盗めるや」という抗議の声を想起させる。

こうして見ると、「大つごもり」は、ユゴーの影響を受けて思軒が主張した「社会の罪」の文脈と無縁ではなかったと考えられる。先に述べたように、「大つごもり」と同様に西鶴の手法を取り入れて、大晦日に「天賦正直」な若者が窮地に追い込まれて盗みを犯す物語を描いた松原岩五郎の「新長者鑑」もまた、「社会の罪」の主張の影響下に成立した作品である。先にも触れた同時代評の指摘にあるように、松原岩五郎は「森田氏の『社会の罪』を作るや逸早く」、「判評―社会の罪」（明二四・五・一六『国民新聞』）と題する文芸批評を発表し、思軒訳「クラウド」にも言及している。

その一方で、両作品の顕著な相違点として注目したいのは、主人公が盗みに追い込まれていく場面の描写である。「新長者鑑」の主人公鶴松が盗みに至る場面では、「債主から矢の催促」を受けて「気に病むで居らる、容子」の恩義ある兄嫁を「思い遣」り、「証文貸」先の商人に「借財」の返済を頼むが断られ、「善い世帯を持ちながら僅か五円か三両の期限金を引づり倒して我共に辛い目を見せる了簡か」と怒りに駆られ、衝動的に「懐裡へ手をさし入」れて「懐嚢」を奪うという展開になる。「天稟の美質」をもつ「温厚しい」主人公の盗人への変貌の描き方が唐突でリアリティーに欠ける。それに対して、「大つごもり」の特徴として際立つのは、お峯がやむなく盗みへと至る展開の緻密に伏線が張られた説得力のある描写である。(15) 伯父一家の窮状、帰宅した放蕩息子に対する「癇癪」からお峯との約束を破棄したご新造の「無情」、娘の「初産」に駆けつけた御新造の不在、「道の遠きに可愛さう」に歩いて二円を受け取りにきた三之助の存在などが、お峯を盗みへと駆り立てていく仕掛けとして細部に至るまで巧妙に仕組まれている。三之助を待たせて「内外を見廻」すと、「嬢様がたは庭に出て追羽子に余念なく」、「若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中」というように、一瞬一瞬に知覚された光景を、カメラの連続シャッターを切るように描く高密度な画像の累積は、追い詰められて、呼吸が早くなっていくような加速度的な緊迫感を生み出している。お峯が盗みを犯す瞬間の「悪人」に「なりたうは無けれど成らねば成りませぬ」という心の叫びが示すように、お峯が「悪人」になることが不可避な状況に追い込まれていく過程を、説得力のあるリアリティーをもたせて読者の共感を誘いながら描き出そうとした作者の意図が窺える。

四、石之助の造型

先述したような下層社会ルポルタージュにみられる貧富の対照という構図と比較して、「大つごもり」では、石之助という山村家の放蕩息子を登場させ、富を獲得し、外面的には成功者と見えるが家族関係が歪み、内面的には満たされない山村家の内側を描いていることが注目される。それは、「十三夜」にみられる「村田の二階も原田の奥も憂きはお互ひの世におもふ事多し」という複眼的な捉え方にもつながると思われる。山村家の「惣領息子」石之助は、「十五の春」から放蕩の生活を始めた。西鶴の作品では、蓄財成功した一代目と遊興に溺れる二代目という対比の構図がみられ、「色遊び」による二代目の放蕩が繰り返し描かれている[16]。例えば、一葉が愛誦したといわれる『日本永代蔵』巻一の二「二代目に破る扇の風」は、倹約・堅実な生き方をして身代を築いた一代目と対照的に色道に溺れ遊興して没落する二代目が描かれている。しかし、「大つごもり」の石之助の放蕩は、「品川へも足は向くれど騒ぎは其座限り」という程度で、西鶴作品にみられる「色遊び」による遊興とは異なり、貧乏人の遊び仲間に家の金をばら撒くという風変わりなものである。石之助は、「車町の破落戸（ごろつき）がもとをたゝき起し、それ酒かへ肴と、かみ入れの底をはたきて無理を徹すが道楽」で、「貧乏人を喜ばして、大晦日を当てに大呑みの場処」も決めている。それを内緒にするどころか、お峯との約束を破棄した薄情な継母に対する皮肉のように、「今宵を期限の借金がござる、人の受けに立ちて判を為たるもあ」るとして、「破落戸（ごろつき）中間に遣る物を遣らねば此納りむづかしく」、喧嘩沙汰になれば「お名前に申わけな」いと、親を脅迫して無心する。「家の名をしく我が顔はづかしきに、惜しき金庫をも開くぞかし、それを見込みて」というように、金銭を与えるという石之助に対する「ぬるき旦那どの、処置」は、家名や家族の体面を保つためのものであった。先妻の子である石之助の放蕩は、「母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔しより耳に挟」んだことがきっかけである。石之助への相続について、御新造は「石油蔵に火を入れるやうなもの、身代咽となりて消え残る我等なにとせん、あとの兄弟も不憫」と父親に「讒言の絶えまなく」、「若隠居の別戸籍にと内々の相談」は決まった。お峯が破損させた「手桶」一つにも「身代これが為につぶれるかの様」に「明くれの談義」するほど「吝」いが、娘には甘く、「花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて褄をかさねて、眺めつ眺めさせて喜ばん」というように娘の衣裳に贅沢を尽し、出費を惜しまない溺愛ぶりであった。「母が泣きをと父親の事は忘れて」始めた石之助の放蕩が、家の金を「巻きあげ」て散財し「貧乏人を喜ば」すという異様なものだったのは、我が子を溺愛し他人には冷淡で欲深い継母と愛情の「薄」い父に対する反抗があったのではないかとみられる。

従来の研究では、石之助の「任侠的」な性格が注目され、鼠小僧[17]や同時期の〈侠〉をめぐる言説との関連等が指摘されてきた[18]。

しかし、ここで注目したいのは、薄情な父親、血縁の絆に固執する継母の実の子への偏愛、金銭に執着し、貧者から金を取り立てて蓄財する富裕な家への反発という石之助の設定である。そこで改めて注目したいのは、二十三階堂（松原岩五郎）の「長者鑑」（明二四・六『新著百種』第一五号）との関連である。主人公の小文治は、「当代富限の聞へ高き大長者」の息子であるが、「三歳の折母に死別れて後」は「陰険極まる庶母庶子」等の中で「生育」した。「父の恩愛薄き日影に成長したる者とて生来未だ家族的親愛といふ所は微塵解せず」、「家族の関係円満ならぬ」家庭環境が性格形成に影響を与えて「天真を傷める事少からず」、「懐疑的な質」となった。義母は「我子の衣裳我児の什具に奔走」し「我児の栄耀を寿」いで実の子を偏愛し、自分は「家族に冷遇」されて「我家を唯居づらき処」と思い、母の姪を「母の如く敬ひ親しむ」ようになる。成長した主人公は、「高利の貸出し長者の名義を笠に冠」り「利分を貪ぼつ」て「富貴に驕ッて居る此の家族」に反発し、「年中利子に逐はれて生涯気運の開く時なき有様」の貧者に同情し、「金貸一流」に「憎悪の念」を抱くようになる。小文治は、借金の返済に追われて店を閉め、「家を引払」って「子供等を路頭に迷はせ」る窮状に陥った一家に接して「哀れを催」すが、実はその債主が「母の如く」に慕う女性であり、「家業の傍らに小金を貸出し」て「強欲無惨」な「金利の奴」となっていたことを知り、心の拠り所を失うことになる。同時代批評では、「富限家内の風波を写」した「長者鑑」について、「西鶴が『胸算用』又『永代蔵』に類せる」と西鶴の影響を指摘し、さらに「可憐なる少年」が「情愛の疎濶なる」家族を「憎み」、「年中利子に追はれて」苦しむ人々を生み出す「金貸一流を蛇蝎視するに到りしも社会之罪なり」（「長者鑑」、明二四・七『国民之友』第一二五号）というように「社会の罪」を描いた作品として捉えている。

このように見ると、「長者鑑」と「大つごもり」とは、富裕な家における家族関係の歪み、家庭に居場所のない子供の孤独、金銭に執着し蓄財に走る家への反発と貧者への共感が描かれているという点において、見過ごせない共通性を持っている。その一方で両作の顕著な相違点としては、「長者鑑」では、家庭内で疎外された青年が心の拠り所を母親代わりの女性に求め、やがて恋慕を抱くが裏切られるという展開になるのに対して、「大つごもり」の石之助は、貧者との交流、散財という放蕩に走る。また、「長者鑑」の主人公が心情を吐露する人物として描かれているのに対して、石之助は自己の胸の内を語らない人物として設定されている。浅野氏が指摘するように[19]、本音や内心を秘めた石之助の存在は、作品世界に「深い奥行き」を与えており、そうした陰影深い人物造型に一葉独自の特徴が認められる。蓄財に走る山村家への石之助の反発は、家の金を「巻きあげ」て「貧乏人を喜ば」す「道楽」や親への「嫌やがらせ」、皮肉、脅迫などの屈折した言動で暗示される。「去歳にくらべて長屋もふえたり、所得は倍にと世間の口より我家の様子を知り」て、石之助は「巻きあげて貴様

たちに好き正月をさせるぞ」と「貧乏人を喜ば」す。その行為の根底には、貧者への共感だけではなく、「誰が物にする気ぞ、火事は燈明皿よりも出るものぞかし、総領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか」という言葉から窺えるように、自分を追い出して「家督は妹娘」に譲り山村家の財産を「相続」させようとする貪欲な継母と薄情な父への反抗があったと考えられる。「持つまじきは放蕩を仕立るまゝ母ぞかし」という語り手の言葉は、石之助の放蕩を促す家庭環境の問題を示唆している。しかし、父親は石之助の行為の真意を共感的に理解しようともせず、放蕩息子に「天魔の生れがはり」と罵りながら、「これは貴様に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹共が不憫、姉が良人の顔にもかゝる」と外聞を憚り、「無分別に人の懐でも覗うやうにならば、恥は我が一代に止まらず」と「家の名」に傷がつくのを恐れて「五十円束」を差し出す。「何処へでも帰れ、此家に恥は見せるな」という父親の突き放すような言葉に対して、「お帰りではない、お出かけだぞ」と応ずる石之助の言葉は、「総領」息子としての存在を認められず、家庭に居場所のない彼の哀れさを印象づける。

一年の金勘定が始まり、お峯は死ぬ覚悟までするが、石之助が残した「引出しの分も拝借致し候」という「受取一通」によって、すべては放蕩息子の罪になった。石之助の行為が「我れしらず」か「知りて序に冠りし罪」なのかについては、「見し人なしと思へるは愚かや」という語り手の言葉が示唆するように、お峯が「今ぞ夢の真最中」と思った石之助が、借金を無情に断る継母の言葉を聞き、お峯が盗んだ二円を「三の助に渡して帰した」のを見て、残りの束を取り「受取」を残して彼女の罪をかぶったと考えられる。松坂俊夫氏は、石之助の行為について「積極的にお峰を救った」として、「貧富の差への秘かな抵抗と、抗議」を読み取っている[20]。しかし、貧者を救済する石之助の行為の動機については、単に義侠的気質に還元することのできない問題を含んでいると思われる[21]。山村家の中で「悪者（わる）」と疎まれ、親との関係で自分の存在を認めてもらえない石之助は、蓄財に執着する親から「巻きあげ」た金を与えて「貧乏人を喜ば」すことで自分の存在価値を見いだそうとし、貪欲で他人に薄情な継母や家の体面を重んじて愛情の希薄な父親への反抗を表していたのではないかと推察される[22]。石之助の沈黙は、裕福でありながらも歪んだ家庭環境に育った彼の内奥に秘められた複雑な思いを陰影深いものとして描き出し、読者の感情移入を喚起している。

石之助を救済者とする読みに対して、高田知波氏は、石之助の行為はお峯を「絶体絶命の窮地」に追い詰めていくと指摘している[23]。同時期の松原岩五郎の下層社会ルポルタージュでは、「利を以て利を殖やすの工夫」というような搾取の構造、悪循環が繰り返される仕組みが暴かれている。『最暗黒之東京』の「（十二）融通」では「日済貸」に言及し、「一円貸して日に三銭づゝ取立四十日にして済しくづす」、つまり「月二割の利息」とし、「此の内手数料として五銭と印紙料一銭を引き去れば正味七十五六銭に過ぎず」、もし「期限内に皆済せざれば債主は是を幸機会として喜

び、残額に少許を補足して亦是を元金に書き直す」、つまり「利を以て利を殖すの工風なり、斯の如くして借主は一生奉公す」と述べている。松原の視点は、「活計」の本質的な悪循環を鋭く捉え、「取らるゝもの又決して愚なるにあらず唯算に暗らきのみ」と語っている。このように『最暗黒の東京』は搾取の構造を示し、返しても返しても追いつかない借金地獄のカラクリを暴いている[24]。ここではお峯の言う「術もなし方もなし」といった「正直」者が報われない社会の仕組みが示唆されているのである。こうしたルポルタージュの言説を視野に入れると、安兵衛の借りた十円の返済義務は延期になっただけで、三ヶ月後には同じような事態に陥る可能性は高く、石之助の行為は一時的な救済にしかなり得ないことが見えてくる。伯父が二円の調達を頼んだとき、お峯は「又の宿下りは春長、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの」と承知したが、「孝の余徳」だけでは救われ得ない厳しい現実が窺える。

西鶴の『世間胸算用』[25]では、「渡世を油断」し「胸算用ちがひ」で「節季を仕回ひかね迷惑する」貧者の「大晦日」の「闇」が描かれているが、その最終章である巻五の四「長久の江戸棚」の結びは、「朝日かげ」が「万民の身に照りそひ、くもらぬ春にあへり」として、めでたく明るい正月を迎えることになる。それに比して、「大つごもり」の結びは、「石之助の罪に成りしか、いや〳〵知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峰が守り本尊なるべし」で締め括られ、お峯の切羽詰まった心情、極度に張りつめた緊張が解けて安堵をもたらすはずの結末に、「後の事しりたや」という語り手の一言をあえて加えている。この末尾表現については、従来様々な議論がなされてきた[26]が、石之助は「守り本尊」となり得るのか、「後の」お峯が向き合う現実へと読者の想像力を喚起していることに留意したい。先に述べたような松原岩五郎の下層社会ルポルタージュとの関連を視野に入れて見ると、「後の事しりたや」という末尾の一言に込められた夢物語で終わらない「大つごもり」が内包するリアリティーが浮かび上がってくるのである。

注

（1）暉峻康隆『西鶴　評論と研究上』（中央公論社、一九四八・六）、吉田精一「一葉小説と古典」（『近代文学鑑賞講座』第三巻（角川書店、一九五八・一一）、竹野静雄『近代文学と西鶴』（新典社、一九八〇・五）等の検討がある。

（2）「『大つごもり』の構造」（『樋口一葉の世界』平凡社、一九七九・一二）

（3）「大晦日はあはぬ算用―『大つごもり』」（『樋口一葉『いやだ！』と云ふ』集英社新書、二〇〇四・七）

（4）山田博光編『民友社思想文学叢書第五巻　民友社文学集（一）』（三一書房、一九八四・五）は、『最暗黒の東京』の新聞初出の形を翻刻編集し、単行本未収録の部分も収録している。

（5）『横山源之助全集　第九巻』（法政大学出版局、二〇〇六・一一）所収。

（6）木村洋「明治中期、排斥される馬琴―松原岩五郎の事例をめ

ぐって―」（『日本文学』第五七巻六号、二〇〇八・六）は、馬琴批判の動向との関連から松原岩五郎の西鶴受容について考察し、「西鶴の小説が庶民たちの『世態の内幕』の精密な報告を達成し得た稀有な試みとして松原に見い出されていた」と指摘している。ただし、思軒が主張する「社会の罪」の影響については言及されていない。

（7）高田知波「距離の物語―『大つごもり』への一視点」（『樋口一葉論への射程』双文社、一九九七・一一）

（8）西川祐子「樋口一葉のモデルニテ」（『国文学　解釈と教材の研究』第三九巻一一号、学燈社、一九九四・一〇）

（9）小森陽一『ことばの力　平和の力―近代日本文学と日本国憲法』（かもがわ出版、二〇〇六・一〇）

（10）『明治東京下層生活誌』解説（岩波書店、一九九四・九）

（11）立花雄一『明治下層記録文学』（筑摩書房、二〇〇二・五）

（12）谷川恵一「うつろな物語―一葉『大つごもり』」（『言葉のゆくえ―明治二〇年代の文学―』平凡社、一九九三・一）

（13）松下浩幸「『大つごもり』論―貧民救済言説を手がかりとして―」（『論集樋口一葉Ⅲ』所収、おうふう、二〇〇二・九）

（14）川戸道昭「明治時代のヴィクトル・ユゴー―森田思軒の邦訳をめぐって―」（『明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》ユゴー集Ⅰ』大空社、一九九六・一〇）は、思軒のユゴー翻訳が当時の読書会に与えた影響について詳細に論じている。

（15）山本欣司「『大つごもり』を読む―『正直は我身の守り』をめぐって―」（『立命館文学』第五四〇号、一九九五・七）は、「お峯が罪を犯すのは不可避であった」として、お峯が盗みへと至る描写の密度の高さについて指摘している。

（16）谷脇理史『経済小説の原点『日本永代蔵』』（清文堂、二〇〇四・三）参照。

（17）小林裕子「反転するモラル―『大つごもり』論」（『樋口一葉を読みなおす』所収、学芸書林、一九九四・六）は、石之助と鼠小僧の類似性について指摘している。

（18）大井田義彰「『文学界』の中の一葉―『大つごもり』と〈侠〉―」（『論集樋口一葉Ⅲ』所収、おうふう、二〇〇二・九）は、同時期の〈侠〉をめぐる言説との関連から石之助を「〈侠〉を体現した人物」とし、「大つごもり」を「『侠客』による弱者救済の物語」と捉えている。

（19）浅野洋「『大つごもり』の遠近法（パースペクティブ）」（『国文学解釈と鑑賞』第六〇巻六号、一九九五・六）は、「自己の内面を語ることに寡黙」な石之助は、作品に「深い奥行き」を与えていると指摘し、「遠景」に配された「実母の存在」に注目して、そうした「遠近法の獲得が作家・一葉に『奇跡』をもたらす具体的な創作技法」ではないかと述べている。

（20）「『大つごもり』論」（『増補改訂樋口一葉研究』教育出版センター、一九八三・一〇）

（21）北田幸恵「『大つごもり』論―もう一つの〈闇夜〉―」（『国文学　解釈と鑑賞』第六〇巻六号、一九九五・六）は、「石之助の親への反発からの『不了間』」は、「貧者への共感と救済の意識へと確固とした主義」に変わり、「義侠心にあふれた資産家の息子としてお峰の救済者を演じる」と指摘している。

（22）塚本章子「樋口一葉『大つごもり』論―子供たちの黙劇―」（『和歌山工業高等専門学校研究紀要』第三六号、二〇〇一・一〇）は、石之助の「実母への密かな思慕」に焦点を当てて、その行為の根底には、「実母の苦労を忘れて、この軽薄で欲深い女性に丸め込まれ、しかも自分を守ってくれようとしない父に対する激しい反抗があった」と捉えている。

（23）注（7）に同じ。

(24) 高橋広満「解題『最暗黒の東京』」（千葉正昭・田中実編『技術立国ニッポンの文学』所収、鼎書房、二〇〇三・三）は、この書の特徴について、「利子が元金を越えてしまうような借金地獄が物語る」ように「搾取の構造」に焦点を当てていると指摘している。

(25) 引用は『井原西鶴集③』所収、新編日本古典文学全集（小学館、一九九六・一二）に拠る。

(26) 滝藤満義「『大つごもり』―『はなし』の方法」（『一葉文学生成と展開』明治書院、一九九八・二）は、結びの部分について「西鶴的落ちの手法」を用いていると指摘し、また木村真佐幸「『大つごもり』成立の背景―『後の事しりたや』一視点―」（『一葉文学成立の背景』桜楓社、一九七六・一二）は、「後の事」とは「お峰の今後の生活上」において「拘束し」続ける「罪の意識」の行方を意味すると述べている。

付記　一葉作品の引用は、『樋口一葉全集』第一巻（筑摩書房、一九七四）に拠る。ただし、原則として旧字を新字に改め、ルビは適宜省略した。

（やぎ・みずほ　修文大学短期大学部）